

子どもの具体的な姿を通して 「非認知(社会情動的)能力」 を可視化し保育の質の向上につなげる

一般社団法人 大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

子どもの成長に大きくかかわるとされる「非認知(社会情動的)能力」(以下、非認知能力※)ですが、「そもそも非認知能力って何?」「自園の子どもにも育っているの?」という声もよく聞かれます。一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所では、そうした疑問を出発点として、保育者同士が対話を通して非認知能力についての理解を深め、保育の質を高めていく研究を、6年間にわたって実施しました(図1)。子どもの具体的な姿から非認知能力の高まりを捉える実証研究と、実際に非認知能力が育まれた様子をエビデンスで確認する理論的研究の側面をもつ研究について、3人の先生にお話をうかがいました。



一般社団法人
大阪府私立幼稚園連盟
教育研究所 所長
幼稚園型認定こども園
高槻双葉幼稚園 教頭
岡部祐輝先生



一般社団法人
大阪府私立幼稚園連盟
教育研究所 副所長
幼保連携型認定こども園
せんりひじり幼稚園・
ひじりにじいる保育園 副園長
安達かえで先生



一般社団法人
大阪府私立幼稚園連盟
教育研究所 副所長
幼保連携型認定こども園
光の園幼稚園 園長
小池聖子先生

研究概要

研究主体：一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所

研究名：第26次研究プロジェクト
「0歳児から6歳児までの保育・教育を
考える～非認知能力はどのように
して育まれるのか～」

期間：2016年4月～2022年3月

研究内容：園における実証研究を行い、
実証研究の効果測定を理論的研究
で実施

【実証研究】子どもの姿をもとに非認知
能力を捉える

【理論的研究】子どもに育まれた非認知
能力を、他調査との比較等を用いて
表す

非認知能力をどう捉え、いかに育ちを支えるか

研究の背景・ねらい

見えにくい力の育ちを可視化

内面的な力であるため、数値化が難しい非認知能力を研究題材とした理由について、一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所(以下、研究所)の所長を務める岡部祐輝先生は、次のように語ります。

「新しい要領・指針*1などでも示されているよう

に、遊びを中心とした保育の重要性についての理解が進む一方で、そこで育まれる力についての理解は十分とはいえない現状があります。そのため、研究所では非認知能力に着目し、遊びや生活を通して見えにくい力がしっかりと育っていることを明らかにしたいと考えました」

研究開始の前年となる2015年には、子ども・子育て支援新制度が始まり、研究半ばの2019年には、幼

*1 要領・指針とは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

児教育・保育の無償化も実施されました。社会全体で子どもにかかわる施策が展開される中、乳幼児期の保育や教育の意義を広く世の中に発信したいと、研究に参加したせんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園副園長の安達かえで先生は語ります。

「これまでは保育者ががんばって取り組んでいることが、社会や家庭になかなか理解されない現実があったと思います。非認知能力に目を向け、可視化することで、幼児教育の質への理解がよりいっそう進んでほしいと考えています」

実証研究の取り組み①

子どもの姿に基づいた非認知能力の分析

研究に参加した園の状況はさまざまであったため、研究所では各園の実態に応じて実践を進める方針としました。そして、「非認知能力は、子どもの育ちのどのような場面で見られるのか」といった疑問を出発点として、月1回程度の研究会で各園の事例を持ち寄って対話することから始めました。

最初は、「非認知能力」という言葉にピンとこない保育者も多く、先行研究や神戸大学大学院教授の北野幸子先生^{*2}の指導を通して学びながら、互いに意見を交わしました。

「保育者が実践の中で感じ取った育ちのうち、『これも非認知能力といえるのかな』といったもの、さらには非認知能力ではないかもしれないものも含めて、数多くのキーワードを出してから、徐々に整理をしていきました」(安達先生)

保育者の対話の中で挙げられた非認知能力のキーワードが集約されると、次第に具体的な子どもの育ちとして非認知能力を捉えられるようになったと、光の園幼稚園園長の小池聖子先生は説明します。

「キーワードは探せば探すほど出てきましたが、そもそも非認知能力とはそういうものなのだろうと理解しました。実践の中で1つのキーワードの中身をより細分化できることもありますし、別の保育者の見方によって新しいキーワードが出てくることもあります」

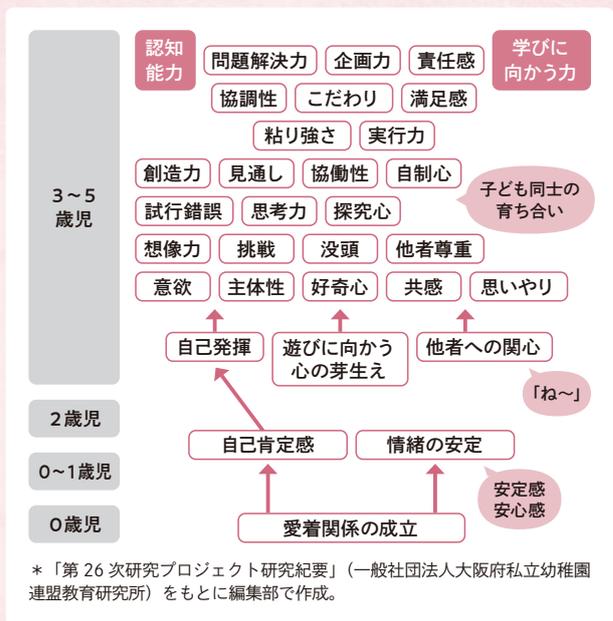
こうして研究会では、乳幼児の育ちを表す非認知能力のキーワードがつけられていきました(図2)。

* 2 北野幸子先生は監修者として本研究に参加。プロフィールはP. 2参照。

図1 研究の枠組み



図2 対話を通して挙げられたさまざまな非認知能力



* 「第26次研究プロジェクト研究紀要」(一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所)をもとに編集部で作成。

実証研究の取り組み②

発達を可能とする保育者の専門性の獲得

● 日常の保育の変化

並行して各園でも、非認知能力の育ちを見つけ出すために、キーワード表などをもとに保育者同士で話し合いました。そうした対話の積み重ねは、保育の質を高める上で大きな意味があったといえます。

「目の前の子どもがどのように育っているかを解釈するトレーニングとなり、回を重ねるごとに精度も高まりました。子ども理解が深まり、『あのかかわりがよかった』『こうした環境を用意したからこんな気持ちが育った』といった気づきが増えていき

ました。自分の保育が子どもの育ちにつながっていることが実感でき、自信がもてるとともに、保育をますます楽しめるようになりました」(安達先生)

複数の目による見取りは、独り善がりを防ぐという面でも意味があると、岡部先生は話します。

「子どもの姿を1人で見ると、3人で見て話した方がよりさまざまな解釈ができます。非認知能力は見えにくい力であるため、できる限り客観性を担保することが大切だと考えています」

日常の保育も、次第が変わっていきました。光の園幼稚園では、子どもに任せる部分を増やすという方針を大切にようになりました。

「保育者が主導していると、子どもは自分のキャパシティを超えて成長していかないことに気づきました。そこで、できるだけ子どもに投げかけてみて私たちはサポートに回るようにすると、子どもの発想の伸びしろが増え、保育も切れ切れにならずに広がっていくようになりました」(小池先生)

例えば、4月に穴掘りをしたときに出てきたかけらをきっかけに、「鉱石ではないか」「恐竜ではないか」などと、子どもたちが自分の興味とつなげて考え、行動。11月の作品展では自分たちが作った鉱石や恐竜の骨組みを飾るなど、継続的で発展的な活動が展開されたといいます。

せんりひじり幼稚園では、毎月、各年齢担当の保育者が集まってカリキュラム会議を行っています。

以前は活動内容の報告や共有が中心でしたが、研究が深まるにつれて、「今月はこんな成長が見られたから、来月はこういう活動を取り入れたい」「子どもの関係性が深まったから、卒園に向けて何ができるかな」など、子どもの育ちをベースとした話し合いが自然と生まれるようになりました。

「子どもの姿の中には、育ちにつながる宝物が数多くあることに気づいたのだと思います。普段の保育の中での保育者のかかわり方や言葉かけが、非認知能力を伸ばすチャンスになるという意識をもって、保育に取り組むようになりました」(安達先生)

● 0～2歳児の非認知能力

研究では、0～2歳児の非認知能力の育ちに着目したことも大きな特徴です。一例を挙げると、0歳児クラスでは、砂場遊びを通して砂の感触を楽しんだり、砂が形になる不思議さを発見したりする姿から「好奇心」「探究心」の芽生えを見取りました。また、楽しい気持ちを保育者と共有し、にっこり笑う姿から「愛着関係」の芽生えを見取りました。

「乳児の非認知能力の見取りは難しく、見落としやすいのですが、ちょっとした目線の動きや手の力の入れ具合など、言葉にはならない表現を通して育ちが見えることに、改めて気づきました。今回の研究では、乳児期から幼児期にかけての非認知能力の発達の系統性までは対象としませんでした。乳児の育ちに関する理解は大変深まりました」(安達先生)

非認知能力の確かな育ちをさまざまな視点から把握

実証研究の取り組み③

保護者や若手保育者への発信方法の開発

子どもの育ちを保護者と共有するために、情報発信の工夫に関する研究にも取り組みました。

「保護者と保育者が子どもの育ちへの思いや方針を共有できると子どもは安心して伸びていきます。逆に、そこにずれが生じると子どもが育つ機会を逃してしまう場合もあるため、保護者への継続した情報発信は、非常に大切だと考えています」(安達先生)

せんりひじり幼稚園では、子どもの育ちを伝えるためにポートフォリオやドキュメンテーションを作成しているほか、園のブログやSNSなど、さまざまなメディアを活用しています。最近では「非認知能力」という言葉を交えて子どもの育ちを説明する機会も増えていきます。

「保護者の間にも『非認知能力』という言葉が浸透してきたため、園の通信で非認知能力やそのキーワードを説明し、園がめざす保育や子どもの姿をわかりやすく伝える工夫をしています」(安達先生)

光の園幼稚園では、週に2、3回、保護者に対して子どもの姿を写真と文章で伝えていましたが、その内容が質的に大きく変化しました。

「以前は、『こんな遊びを楽しんでいます』といった事実が中心でしたが、遊びや活動を通してどのような育ちが見られたかななどを、『非認知能力』という言葉より、もう少しわかりやすい言葉で表現できるようになりました。共有したい子どもの姿が保護者に少しずつ伝わるようになり、若手保育者も含めて保育で大切にしていることへの理解が進み始めています」(小池先生)

研究所では、情報発信にかかわる研究の一環として、非認知能力について地域や社会に発信することを目的としたリーフレット*³も作成しています。

理論的研究の取り組み

アンケート調査により実践の効果を検証

研究では、卒園生への2回のアンケート調査により、非認知能力の育ちの可視化も試みました。

アンケート調査の結果を見ると、子どもの非認知能力の獲得を表す行動を尋ねた質問での「本調査」の結果は、多くの項目で8割以上の肯定率を示しています(図3)。また、同一質問をした「Z市調査」

との比較では、多くの項目で数値が上回りました。さらに、同一ではないものの類似の質問をしているベネッセの「幼児期から小学生の家庭教育調査・縦断調査」の7項目との比較でも、良好な結果が得られました。

「他調査との比較では、本研究の参加園の卒園児は、特に自尊心やがんばる力、勤勉性などが非常に高いことがわかりました。質問の表現が異なる調査との比較もありますが、非認知能力として乳幼児期に育みたい力が、しっかりと育っていることが感じられました」(岡部先生)

研究の成果をもとに、各園では現在も非認知能力の育ちを支える実践を続けています。今後さらに取り組みを深める上で、もっとも気をつけていることの1つが「形骸化」を防ぐことです。

「子どもの姿から非認知能力の育ちを解釈することに慣れてくると、友だちを手助けしていたら『思いやりの気持ち』など、条件反射的にあてはめるだけになりがちです。しかし、保育者同士で対話をしながらより深く見ていくと、子ども同士の人間関係の深まりなど、別の育ちがあることに気づくかもしれません。そのように、常に対話をする中で子どもの多様な育ちを見取り、支えることを、これからも大切にしていきたいと思います」(安達先生)

図3 卒園児の非認知能力等の調査と他調査との比較

項目番号	質問の内容	キーワード	本調査	Z市調査	ベネッセ調査
1	自分のことが好きですか	自尊心	94.0	80.4	—
2	失敗してもまたがんばろうと思えますか	がんばる力	97.2	82.6	96.3
3	はじめてのことに挑戦しようと思えますか	外向性・好奇心	95.1	91.4	93.4
4	自分のことをやさしいと思えますか	協調性	86.8	75.3	—
5	よくほめられますか	自尊心	81.6	81.4	—
6	誰とでも仲良くできますか	協調性	89.2	80.7	92.2
7	クラスの役割をしっかりと果たしていますか	勤勉性	93.6	77.4	—
8	自分ががんばり屋さんだと思いますか	がんばる力	90.3	90.2	74.1
9	どうしたらいいか不安になるときがありますか	神経性傾向	75.3	67.7	—
10	友達と考えが違ったときに相手の話を聞くことができますか	協調性	93.0	86.6	83.8
15	自分の考えをみんなの前で話すことができますか	自己主張	74.5	90.6	86.9
16	新しいことや変わったことが好きですか	開放性	91.0	82.3	—
18	ふしぎだな、どうしてだろう、などと考えることがありますか	探究心	89.3	86.1	—
21	友達と協力することができますか	協調性	97.8	87.5	95.8
24	しょうらいの夢や目標がありますか	自尊心	93.2	83.4	—
25	自分はおとなしいと思えますか	外向性	41.3	61.5	—

※数値は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計(%)。 ※全部で25の質問項目のうち、他調査と比較している項目のみを抜粋。 ※各項目の最高値を強調。

※本調査は、2018年3月の第1回卒園生アンケート(449人)と、2021年3月の第2回卒園生アンケート(188人)を合計した637人を分析対象としている。

※Z市調査は、2018～20年に小学1年生(9,958人)を対象に行った調査。

※ベネッセ調査は、2015年3月に小学1年生(544人)を対象に行った「幼児期から小学生の家庭教育調査・縦断調査」。

*「第26次研究プロジェクト研究紀要」(一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟教育研究所)をもとに編集部で作成。

*3 0～5歳児の育ちに関するリーフレットは、右記のURLをご参照のこと。http://www.kinder-osaka.or.jp/document_list.html

もしくは、一般社団法人大阪府私立幼稚園連盟の公式サイトより、

「教育研究・研究所・経営研究関連資料」→「こどもとこ 第26次プロジェクトチーム著」をご参照のこと。